

大学出版

2003.9 No.58

秋

フォトグラファアの四季——秋 ■ 堀口マモル ——表 2

特集* 歴史と地域が織り成す「書籍文化」の諸相

情報化の時代と書籍・文庫 ■ 五味文彦 —— 2

小樽文学館という場所で ■ 亀井秀雄 —— 10

歴史に見る福岡の書店 ■ 鳥巢京一 —— 14

科学する目 11 直立二足歩行 ■ 青木淳一 —— 18

歩く・見る・聞く 知のネットワーク 31 渋谷区立松濤美術館 —— 20

大学出版部ニュース —— 22

AJUPオンライン —— 32

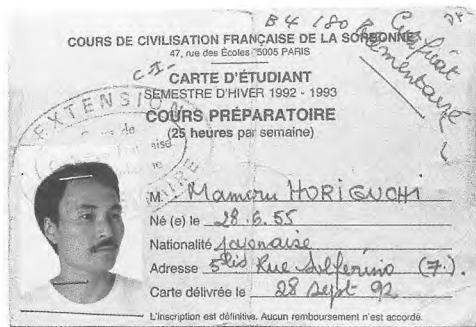
関西支部だより —— 表 3

大学と社会を結ぶ知のネットワーク



日本大学出版部協会

THE ASSOCIATION OF JAPANESE UNIVERSITY PRESSES



ソロボンヌ大学の学生証

フォトグラファーの四季

秋 *Automne*

Bonsoir!

堀口 マモル

一四年間活動の中心であったニューヨークを離れ、パリに居を移したのは一九九二年九月。新しい刺激を求め、写真家として次なる挑戦を求めている転居でした。

まずフランスを、そしてフランス人を知ることが先決と、ソロボンヌ大学の初級語学クラスの受講を申し込んだのですが、受付係のフランス人はフランス語しか使わず、全くフランス語のわからない私は、入学書類の提出にさえずいぶん苦労したものです。ところが、その受付係もアメリカの学生が強引に話す英語にはタジタジとなり、英語で返答。さすがは自己主張の国アメリカと、改めて「アメリカンパワー」の力強さを感じ、そう言えばアメリカのモダンアートのパワーにも通じるものがあるのではと、妙に納得したりもしました。

クラスには、アメリカ、カナダをはじめ、中南米、アジア中近東、ヨーロッパ各国から平均年齢は二二〜三歳で二四人の生徒が集まっていました。ある日、クラスメート達とカフェで雑談をしていたとき、イスラエルからの学生が自国の軍事力の優位性を近隣諸国との比較表を示しながら熱弁しはじめたときには、いろいろなバックグラウンドを持つ人があるのだと考えさせられました。

二クラス八ヶ月で学校は辞めましたが、その間は寝ても覚めてもフランス語。長い人生の中で、この時ばかりは頭がおかしくなるほ

ど勉強しました。

学業に追われながらも、芸術の都パリから何かを吸収しよう、美術館、写真ギャラリー巡りも忘れませんでした。夜になり暗くなるとカメラを首に下げ、街を徘徊することもしばしば。パリを題材にした写真家達は、なにに惹かれて、なにを感じて、シャッターを押し続けたのか？ 彼らの目にはパリはどのように映ったのか？ ということに思いを馳せ、壁一枚、街灯一つから新しい何かを感じ撮ろうと、真剣にシャッターを押し続けました。

また、フランス人アーティストのグループ *Plupart* に属していた私は、毎週のように仲間達と安いワインを飲み、スパゲティを食べ、一晩中下手なフランス語を使っては、アートについて語り合っていました。ある時は、モンマルトルにあるFM放送局の生放送番組で、我々のグループが取材され、フランス語でインタビューを受けた事もありました。今思えば下手なフランス語で罔々しく良くやったものです。こういう経験もその後の活動に大いに役立っている、と確信しています。

三年弱という短い期間でしたが、パリでの生活で学んだことは数知れず、今でも私の心に深く、深く刻み込まれています。

(ホリグチ・マモル / 写真家)

..... *

私のホームページはこちらです。
<http://www.mamoru.h.com>

特集

歴史と地域が 織り成す 「書籍文化」の諸相

「出版不況」という言葉がすっかり定着し、前年割販売実績なる統計結果を連続六回も経験することになった日本の出版界ですが、書籍の年間新刊点数は何故か伸び続け七万点を優に超えているようです。出版する側にある大学出版部の人間であることを意識しながら、読者の皆さんと共に、「私たちは書籍と何を求めているのか、私たちがとって書籍とは何か」といった素朴といえは素朴、しかし多分本質的な「疑問」に向き合ってみたい、というのが本特集のバックグラウンドです。

中世「情報化」社会は「不特定多数の読者の誕生」によってどのような書籍需要を新たに生み出したか、物語を私たちの許に運んでくれる装置としての書籍が地域に根付くことどんな新鮮な「物語」を紡ぎ出せるのか、書籍への渴望が書店の時代を作り出していった九州・福岡の歴史的経験、などから、私たちは一人の読書人として、あるいは出版に携わるものとして、多くのことを学び取れるのではないのでしょうか。

情報化の時代と書籍・文庫

五味 文彦

(東京大学大学院人文社会科学系研究科教授)

ビジュアル・コミュニケーション

今からほぼ七百年前の延慶二年(一一三〇九)、奈良の春日神社に絵巻『春日権現験記絵』が奉納された。

これは朝廷と鎌倉幕府との間の交渉の仲介役を務めていた西園寺公衡が寄進したもので、現在は宮内庁三の丸尚蔵館の所蔵となっており、時々その一部が一般に公開されている。朝廷の絵所にあつた高階隆兼が描いた優品だけあつて、正統的で、また丹念に描かれていることから、絵巻の研究者からは基準作品となるものとしても極めて高く評価されている。

この絵巻にここで最初に触れたのは、この描かれたのが極めて激動の時代であり、現代のわれわれの社会を考へるうえで、大きな示唆をあたえてくれるからである。この少し前の永仁年間(一一九〇年代)から、日本列島の社会は大きな変化に見舞われ、絵巻はその流動した状況を色濃く反映し、またそれを描いている。

すなわち奈良の春日神社は興福寺別当の支配下にあつたが、永仁年間からその別当を出していた大乗院と一乗院の二つの院家の対立が高じ、やがてそれらにつらなる「悪党」が御神体の鏡を奪つて山中に隠すという前代未聞の行動に出たのであつた。

春日大明神の神威を失墜させたこの事件を処理するなかで、鎌倉幕府はそれまで大和国には置いていなかった地頭を配し、さらには春日の山木が枯れる奇瑞も起きた。そこで春日の神威の回復を願つて、この絵巻が制作されるに至つたのだが、そこには悪党の動きや合戦の様も克明に描かれている。

この時代、悪党たちは様々な情報を得て、神出鬼没の動きを示し、各地をまたにかけて行動していた。播磨国の事情を記した『峰相記』という書物によれば、播磨では悪党の活動が正安の頃(一一三〇年前後)から目立ち始めたといひ、「所々の乱妨、浦々の海賊、寄取、強盜、山賊、追

落」などの行為をし、その姿は「異類異形」の様であったという。こうした悪党の代表的存在こそかの楠正成であって、やがて後醍醐天皇に結びついて倒幕勢力を形成してゆくことはよく知られている。

この悪党の活動に象徴されるように、鎌倉末期は情報が急速に駆けめぐった時代である。二度の蒙古襲来以後、大陸からの情報に敏感になり、また朝幕間の交渉が頻繁となつて、新たな情報が常に求められるようになった。幕府が京都の政治を左右したことで、朝廷や六波羅探題では幕府からの情報を逸早く得ようとし、また京都の情報も様々なルートを通じて関東に直ぐに伝えられた。

交通路の整備も著しかった。唐船が大陸と列島を結んで唐物が流入し、僧が大陸と列島とを往来し、また東海道を旅する人々が増加して紀行文が作られたり、海道の様子を謡う早歌が流行した。幕府は東海道の宿々に二頭の早馬を常備させ、鎌倉・京都間を三、四日、京都・博多間を六、七日で伝達するようにしたが、これはまさに情報化の時代をよくものがたっている。

ここに情報の入手を求め、また情報を効果的に伝達しようとする動きが活発化していったが、絵巻物はその情報の伝達手段としての有用性が認識され、広く制作されることとなった。肥後国の武士の竹崎季長が、文永・弘安の合戦での活躍を描かせた『蒙古襲来絵詞』がなったのは「永仁二年二月」のことである。

季長は一族との所領争いの結果、本領を失ってしまい、恩賞を求めて文永の役に出陣したものの、その恩賞がなかなか出ないことに業を煮やし、一族の反対を押し切って鎌倉に上つて御恩奉行の安達泰盛に直訴し、ついに御恩を獲得することに成功した。弘安の役ではその恩に応え勇猛果敢に戦ったが、そうした事情を絵巻に描かせたのである。

続いて浄土真宗を開いた親鸞の絵巻が制作されたのは永仁三年十月中旬のことで、「二巻の縁起を图画せしめしより以来、門流の輩、遠邦も近郭も崇て賞玩し、若齢も老者も書せて安置す」とあるように（『慕婦絵詞』）、門流の人々に見せる意図から制作されたものという。祖師の伝記を文字だけでなく、絵巻にも著わすことで、人々に信仰を実感させようとしたのである。

律宗の忍性も、戒律のあり方を伝えるために大陸から日本に渡来した奈良時代の僧鑑真の行状を絵巻『東征伝鑑真』に描かせたが、それは永仁六年八月のことで、これは唐招提寺に寄進されている。鑑真の動きを描くことで律宗の信仰を訴えようとしたことがわかる。

さらに時宗を開いた一遍の行状を描いた絵巻の制作も、一遍の没後まもなくに始まって、それが完成したのは永仁末年（一二九九）のことである。弟子聖戒が記し、絵は法眼円伊が描いており、「一念の信を催さむがために」描かれたとあるように、人々に広く信仰を勧めるために制作されたことがわかる。

このように永仁年間には、ビジュアル・コミュニケーションとして絵巻が様々な領域で制作されていった。永仁三年には伊勢神宮の神官らによって歌合が行われたが、それほどなく『伊勢新名所絵歌合』として絵巻に制作されている。歌合もまた絵巻に制作されたのである。やがて『絵師草紙』のような絵巻の訴状も描かれるようになる。

こうして絵巻は広く人々にその目で見たいという意図によって制作されたが、それは不特定多数の読者の誕生を意味している。これ以前の絵巻は注文主とその周辺のごく限られた人だけが読み手であった。院政期や鎌倉前期の絵巻は、上皇や将軍からの要請や絵合せのために描かれるなど、読者が限定されていたのである。そのために作者も、制作意図も、制作年次も明らかでないものが多いが、永仁年間からは制作事情が明らかになるものが増え、まさに絵巻の時代といっても過言ではないような盛況を示すところとなった。

そうしたところから、さらに読者の要望を入れた絵巻が描かれた。『一遍聖絵』は一遍の行状を単に描くだけでなく、一遍の足取りにそって、九州から奥州までにおよぶ諸国の名所の風景を描いており、これは当時の人々の列島各地への関心に応じたものである。大陸への関心に沿って描かれたのが、『蒙古襲来絵詞』や『東征伝絵巻』であり、また眼前で起きた事件をよく知りたいという読者の要求に沿って、『春日権現験記絵』や『蒙古襲来絵詞』が描かれ

たのである。

ポレミクな書籍

さらにこのような絵巻の制作の背景には、情報の発信者側の強い主張がうかがえるのだが、その傾向は絵巻だけでなく、この時代の書籍全般に認められる。

その代表格が永仁三年（一二九五）に著わされた『野守鏡』である。そこでは一遍や京極為兼の和歌を厳しく批判するとともに、さらに法華経の読経の芸能では蓮入の流れを非難し、また禅宗の修行のあり方についても批判を加えている。この時期に広がっている様々な動向を批判した警世の書にはほかならない。

たとえば一遍については、「念仏義をあやまりて、踊躍歡喜といふはをどるべき心なりとて、頭をふり足をあげてをどるをもて、念仏の行儀としつ」と記し、「踊躍歡喜」ということばが経論にあることのみから、それを踊り念仏の根拠としてひろめたとして批判を展開している。総じて一遍や京極為兼が「あるがままに」という主張を行っていることの問題点をついている。

絵巻の『天狗草子』もまた、延暦寺や三井寺・醍醐寺などの頭密寺院を始めとする寺院が天狗道に陥っていることを批判するなかで、それに付随して一遍の活動も天狗のなせるものであったとしている。一遍の踊り念仏の際の花が降る奇瑞を揶揄し、天狗が花を降らせている風に描き、ま

た一遍が貴人に念仏札を配って念仏を勧め、一遍の尿が病に効くということで人々がそれを争って求めている風景の絵を載せて非難を展開している。さらに禅徒の芸能のあり方についても批判的に描いている。

もちろんこうした批判があれば、それへの反批判も盛んになされた。批判された歌人の京極為兼は、対抗する二条為定と勅撰和歌集の撰者となることを争って、激烈な論争を展開している(『延慶両卿訴陳状』)。また読経の流れについても、『野守鏡』の拠っていた蓮界の流れを批判したのが幸円の『弾偽褒真抄』である。その書名からしても著しく論争的な作品とわかる。『一遍聖絵』も実はその反批判の一つとして描かれたものであったといえよう。

こうしたボレミークな書籍が生まれた背景を探ってみると、そこには「家」の問題が見えてくる。学問や芸能が家の形で継承されるようになったのは鎌倉時代前半のことであったが、それが鎌倉時代の後半になると、その家に分立が生じ、嫡庶の争いが激化し、対立が生じていたのである。たとえば京極為兼の和歌について見れば、藤原定家の御子左家の流れの中で庶流の立場にあったことから、嫡流の二条家と対抗してその歌論を形成するに至ったという事情があった。

家の分立は様々な場で生じており、たとえば鎌倉後期から始まる皇統の分立もそれからんでいた。後嵯峨上皇の死後、皇統は龜山天皇の大覚寺統と後深草上皇の持明院統

に分裂し、それぞれが皇統の正統性を主張し、わが皇統から天皇を出そうとして鎌倉幕府に対して働きかけたのである。そのため、たとえば歌人の為兼は持明院統と結び、為定は大覚寺統と結んだのであった。

そうした分立状況をよく物語るのが次にあげる二つの絵巻である。一つは比叡山延暦寺の鎮守である日吉山王社の靈験譚を描いた絵巻『山王靈験記絵』であり、その制作の動機は、最後の話に持明院統の光厳天皇の出生が語られているところから、光厳が治天の君になることを祈ったのものと考えられる。

もう一つは同じ日吉社を素材とした絵巻『元徳元年日吉社行幸記』という作品で、これは元徳元年(一一三二)に大覚寺統の後醍醐天皇が日吉社に行幸したのにもない、比叡山の悪党の活動と、後醍醐の行幸の様子とを描いている。皇統の分立も絵巻制作に深く影響していたのであった。では鎌倉幕府の場合はどうか。幕府でもその基礎をなす御家人の家で嫡庶の争いが激化していた。分割相続による所領の分散を防ぐため、庶子には一期分と称して、一生の間は所持できるが、死後には家督に返還しなければならぬという相続制度が取り入れられるなど、所領を継承しない御家人が増加していた。

こうした御家人の保護政策を始めとする政権の舵取りをめぐる、幕府では政争が起きていた。御家人保護の政策を推進した安達泰盛が滅ばされた後、永仁元年(一一九三)

四月十三日の大地震で、鎌倉の山が崩れ、寺院・人家が崩壊し、死者は二万三千二十四人に及んだが、その余震が続く鎌倉で、四月二十二日に執権北条貞時が、泰盛を滅ぼした平頼綱の一族を討って、泰盛の勢力を復活させ、判決の過誤の救済を図り、直接に訴訟の指揮を行うなどの徳政を実施している。

そうしたことから、御家人の訴訟は幕府に次々と寄せられてきたが、ついに永仁五年（一二九七）三月、夜空に出現した大彗星を契機にして、質券売買地を本主（売主）に無償で返却することとした永仁の徳政令が出された。これは昨今の債務放棄の「平成の徳政令」を思い起こさせるような法令であり、幕府を支えている御家人を救済するための対策であった。『蒙古襲来絵詞』を描かせた竹崎季長もかつてはこうした御家人だったのである。

しかし徳政令は御家人のみならず借財を抱える多くの人々を巻き込んでいった。徳政令が出されたという噂が立つや、多くの庶民が「徳政と号して」土地の取り戻しへと動き、そのかたわらで債権確保のために人々は自衛に走った。自らの権利は自らの力で護る自力救済へと人々を動かし、それとともに様々な情報が次々と駆け巡って、それらに俊敏に反応して動くことが求められることになった。

そうしたなかで著わされたのが鎌倉幕府の歴史書『吾妻鏡』である。幕府を形成しその後の執権政治を担ってきた御家人の家々でも、この時期に動揺が始まっていたことか

ら、彼らの家の形成の歴史を探ること、家の立て直しを行おうという意図に基づいて編纂されたのである。

ここでは幕府の形成を担った頼朝とその時代、執権政治へと転換を果たした北条泰時とその時代の二つが、模範的な時代として描かれている。

前者では、平氏を討てという以仁王の令旨が伊豆の北条の館にもたらされ、源頼朝・北条時政の手によって開かれる場面に幕府の始まりを見ている。令旨に象徴される朝廷の権威、頼朝という武士の長者、さらに時政に代表される東国の武士団、これら三つの結びつきによって幕府が始まった、としており、その武士の英雄時代を描いたのである。

後者は、執権北条泰時が有力御家人を評定衆に任じて、その合議によって政治を運営する体制を成立させた時代であり、貞永元年（一二三二）には『御成敗式目』が制定され、評定衆十三人が理非の裁断には公平にあたることを神に誓う起請文を提出している。まさに幕府を形成する御家人の家が確立した時代であった。

そして『吾妻鏡』の編纂された永仁年間といえ、その確立した家の動揺が始まった時代であり、そこで歴史を振り返るとともに、新たな動きに対処しようということになったわけである。

文庫の形成

こうして永仁年間には絵巻をはじめとして様々な書籍が

著わされたが、そうした書籍を著わすためにはこれ以前になつた書籍の蒐集や書写が広く行われていたことを見逃してはならない。

『吾妻鏡』の編纂の材料を調べてゆくと、永仁の徳政令の適用を受けるために、御家人たちが自分の家が御家人であることを証明するために幕府の法廷に提出した文書が多く見え、また神社や仏寺がその所領の由緒を示すために幕府に提出した文書もいくつか見える。なかには相当に怪しい文書もあるが、それらは『吾妻鏡』が永仁年間の近くに成立したことをよく物語っている。

藤原定家の日記『明月記』も利用されていた。これは御子左家のもう一つの庶子の家である、為家が阿仏尼との間に儲けた為相に発する冷泉家が鎌倉に下り、幕府の保護を受けるなかで提出したことともなうものであった。

編纂の主要な材料は幕府の実務を担う奉行人の日記であるが、承久の乱後に成立した『六代勝事記』などの歴史書も利用された。また王朝の説話や中国の史書『史記』なども表現の上で利用されている。なかで興味深いのが、建長四年（一二五二）に著わされた説話集の『十訓抄』が利用されている点で、そのなかに見える逸話が巧みに『吾妻鏡』の逸話に転用されている。

この『十訓抄』は十巻の編に分類して「昔今の物語を種」にした教訓話を配列したものであり、全部で二百八十二話におよぶ。「才芸を庶幾すべき事」や「人に恵を施すべき

事」、「忠直を存すべき事」などの話が多く見え、当時、何が徳目として求められていたかをよくうかがわせて面白いのだが、作者はこれまで明らかではなかった。

そこで最近、私は儒者の菅原為長の孫宗長（観証）であろうと内部徴証から推定していたところが、その観証が実は鎌倉に下って、北条氏の一門である金沢実時の後見となっていたことがわかった。

律宗の叡尊が関東に下った時の記録『関東往還記』の弘長二年（一二六二）条に、鎌倉にやってきた叡尊のために宿所などの手配をするべく金沢実時が派遣してきた三人の僧のうちの筆頭に「観証（為長卿孫、越州後見）」と見えており、さらに実時が文永十一年（一二七四）に書写した『斉民要術』の紙背にも「観証御房」宛の二つの文書が見え、間違いなく『十訓抄』の作者は鎌倉に下って実時に仕えていたと確認できたのである。

『吾妻鏡』の編纂の場が金沢文庫を形成した金沢氏の周辺にあつたろうことは、これまでに推測されてきたが、こうして見てくると、その可能性はすこぶる高い。金沢氏は北条氏の一門のなかでも泰時の時代から、家督の得宗を助ける存在として位置づけられており、その立場に沿って、実時は得宗の時宗を補佐しつつ、京都から下ってきた文化人に学び、古今東西の書籍を蒐集して金沢文庫の基礎を築いていたのである。

そして金沢文庫を背景にして『吾妻鏡』の編纂を担った

のは、おそらく実時の子頭時であつたらう。頭時は幕府の要職を歴任していたが、安達泰盛の娘を妻としていたことから泰盛が滅ぼされた事件に連座し籠居したが、やがて永仁元年に政界に復帰している。

ところで『吾妻鏡』が未完の作品であつたことは、幾つか欠けている巻があることや、記事の著しく少ない巻があることからうかがえるが、それが未完に終わったのは、頭時が正安三年（一一三〇一）に亡くなっており、それにもなうものである。編纂を継承すべき子貞頭はその翌年に六波羅探題となつて京に赴任しており、編纂は中断してしまつたと見られる。

しかし編纂は頓挫したものの、貞頭は京都に赴任すると機会を捉えては書籍の書写を精力的に行つてゐる。建春門院中納言の日記『たまきはる』や『建礼門院右京大夫集』などの歌日記を始め、法書の『法曹類林』、漢籍の『古文孝経』『春秋経伝集解』『六臣注文選』『群書治要』、歴史書の『水鏡』『百練抄』、類書の『管蠡抄』などが奥書から知られているが、それらは今に金沢文庫本として伝えられている。

貞頭は『春日権現験記絵』が春日社に奉納された年に鎌倉に戻つたが、その京にあつた時に親交を結んでいた人物の一人に、『徒然草』を著わした兼好法師がおり、兼好は金沢氏を頼つて鎌倉に下つてきている。その三十四段を見よう。

甲香は、ほら貝の様なるが、小さくて、口のほどの細長にさし出でたる貝の蓋なり。武蔵国金沢といふ浦にありしを、所の者は、へなだりと申し侍る、とぞいひし。

練香の材料となる「甲香」の形状を説明して、それが武蔵国金沢の浦では、「へなだり」といわれている、と語つたものである。兼好の家集の七六番にも「武蔵の国金沢といふところに、むかし住みし家のいたう荒れたるにとまりて」と見えている。

その兼好は『徒然草』百二十段のなかで次のように唐物流入の様子を語っている。

唐の物は、葉の外は、みななくとも事欠くまじ。書どもは、この国に多く広まりぬれば、書きも写してん。唐土舟の、たやすからぬ道に、無用の物どものみ取り積みて、所狭く渡しもて来る。いと愚かなり。

このように唐物珍重を厳しく批判しているほどに、当時の鎌倉には大陸から唐物が大量に流入しており、その一部は金沢文庫に納められたのである。

そうであればこの時期に文庫を形成したのは、金沢氏のみに限られない。北条氏の一門では常盤文庫の存在が知られており、京都では二つの皇統に付属して文庫が設けられていた。おそらく貴族の家でもそれぞれに文庫の形成がなされていたのであろう。

たとえば永仁二年八月に書写された『本朝書籍目録』と

称される書物を見ると、これは「入道大納言実冬卿」から借りて写したものと奥書に見えるが、本朝の書籍を二十の編目に分類し、総計四百九十三の書目をあげて書名と巻数とを記している。そこでその内容を調べてゆくと、日本の書籍の全体を調査して載せたというよりは、三条実冬の家蔵書を中心にした目録と見るべきものとわかる。

なかでもその目録には検非違使関係の書籍が多く見えるが、実冬の家は代々にわたって検非違使の別当に任じられており、管絃に関わる書籍や、和歌と漢詩に関わる書物が多いのも、実冬がそれらに秀でていたからであろう。目録には実冬の家にも備わるような書物が列挙されているのである。なおそうした蔵書の目録が作成され、それが書写されているところに、当時の人々の書物への強い関心がうかがえる。

しかしこうした多くの文庫は続く南北朝時代の戦乱や火事などで消えていったが、金沢文庫の場合、金沢氏が得宗に殉じて鎌倉幕府とともに滅んだにもかかわらず、今に伝えられてきているのは、金沢氏の菩提寺である称名寺に保管され、また鎌倉から離れていたために戦乱や火事の影響を受けなかったからである。

おわりに

以上に見てきたように、金沢文庫は情報化という時代の申し子として生まれ、当時の社会の、知の体系を示す存在

であった。それはまた歴史書の編纂の舞台となり、本の貸出しを行って今日の図書館のような機能をも有していた。その存在は、現代の大学と図書館と大学出版社の三つあり方を考える上で、大きな示唆をあたえてくれる。

金沢文庫の充実と書籍の保管のためには、多大な意欲と熱意が傾けられてきたが、それと同様な意欲と熱意がそれぞれに求められよう。組織は人が動かし運営するものであれば、そのことが一番大事となる。時代の激動とともに組織や機関は転換を迫られるが、それだけに熱意が失われなければ、滅びざるをえない。

また金沢文庫がその後も重視され保存されてきたのは、単に数量を蒐集するだけでなく、良質な書籍を蒐集したことにあったが、そのためには良質であるかどうかをしつかりと見分ける眼力が必要であった。その時々において重要性が認識されていても、時代の変化とともに顧みられなくなるようなものもある。逆に一見して重要でないと思われるようなものでも、後になってみれば重要であったことが認識される例も多くある。先見性と継承性を加味した広い視野を涵養することが大事となろう。

法人化という新たな経営の時代に入った国立大学において、大学出版社には多くが求められることになる。それを受けつつも、長期的な展望に立って、独自に時代を見据えて行くことが望まれる。

小樽文学館という場所で

亀井 秀雄 (小樽市立小樽文学館館長)

「古書」始末の知恵を求められて

私は二〇〇〇年の六月、市立小樽文学館の囑託館長となつたが、現在、韓国の大学へ図書を寄贈する事業を進めており、送った図書はすでに七千冊を超える。それだけでなく、今年の七月からは「韓国文学展」を開催し、八月には韓国から四人、アメリカから一人、研究者を招いて「韓国文学と文化を知る」講演とシンポジウムを行なう。

ただし私たちは、まず最初に「文化交流」という目標を掲げて、右のような事業を始めたわけではない。実状はむしろその反対で、ことの始まりは極めて散文的だった。

小樽文学館には、小樽文學舎という支援団体がある。三十年ほど前、市民の有志が小林多喜二、伊藤整、小熊秀雄など、小樽出身の文学者の資料が散逸するのを惜しんで、文学館設立期成会を結成した。その要望を受けて、市が文学館を開設してからは、小樽文學舎と名前を変えて、援助を続けてきているわけだが、数年前から、市民に呼びか

けて本を寄付してもらうことになった。古書市を開いて、売上金で書簡や生原稿などの資料を購入し、それを文学館に寄贈するためである。おかげで文学館は小林多喜二の書簡など、貴重な資料を入手することができた。ただし、一つ困ったことがある。古書市を開いても市民が手を出してくれない本が多い。それが文学館の一室に山積みになっている。

私が館長になって最初に受けた相談は、この本の「始末」だった。

本が動けば人が動く

私はこれを韓国の大学へ送ることを思い立った。私は北大の教官時代にミュンヘン大学とコーネル大学の客員教授をしたことがあり、退職後も、昨年、アメリカのUCLAの客員教授に招かれた。国立台湾大学や、オーストラリアのキャンベラ大学や、韓国の木浦大学にも講演や学会に出

かけたことがある。ハーバード大学は言うまでもなく、シカゴ大学やコーネル大学、コロンビア大学、UC L A の日本学関係の図書は、羨ましいほど充実している。ミュンヘン大学やハイデルベルグ大学、台湾大学は整備途中という印象だった。それに較べて韓国の大学の図書は手薄な感を免れない。そういう所で利用して貰えるならば、小樽市民の善意も生きるのではないか。図書の価値は、それを必要とする人の手に渡らなければ生まれにくいからである。私は小樽文学舎の了解を得た後、木浦大学に打診をしてみたところ、喜んで受け入れたいという返事だった。

とはいえ、文学館に溜まっている文学全集や雑誌類は、いずれも欠巻や欠号があり、これを埋めなければならぬ。膨大な雑書類から研究資料として意味のある本を選んだり、箱詰めしたりする作業もある。これはかなりやっかいな仕事だが、幸い市民がボランティア組織を作って、手伝ってくれている。

こうして整理した図書を、まず三三〇冊ほど木浦大学へ送ったところ、総長と二人の先生が、わざわざ小樽までお礼に見えた。木浦大学では「小樽文学舎寄贈図書室」という部屋を設け、全国的な共同利用施設にした、という。小樽の市民が喜んで、翌年私も一緒に、図書室の見学を兼ねて、木浦市を訪ねてきた。「交流」はこのように始まったのである。

「文学」フェチシズムを解く

この間、私はこんなふうに考えていた。日本は戦後から一九七〇年代くらいまで、空前絶後の「文学の時代」を迎え、研究者たちは「文学者」を特別視して、実生活発掘の作家研究にのめり込んでいった。全国の文学館はその時代の産物であるが、バブル経済がはじけ、文学館は自治体のお荷物となり始めている。それを承知で、私は北大を辞める時、私立大学の誘いを断って、文学館を選んだ。文学館という容れ物の中身を、新たに市民と作ってみたかったのである。

もちろん収集された資料は、市民の思いが籠もったものであり、大切にする。だが、それと同時に、「文学の時代」の遺産として捉え直すならば、資料の新しい意味が見えてくるし、資料観そのものも変わってゆくのではないか。作家の葉書が百万円以上もする。亡くなった文学者の枕もとで、オタクめいた研究者や、文学館関係者が資料漁りをする。「作家の生涯」という物語を作ることが文学研究であり、それを物象化するのが文学館の仕事だ。そういう思い込みが、右のような悪弊を生んだのである。資料フェチシズムとも言ふべき、この呪縛状態から解放されるためにも、視点転換が必要だろう。この転換が起こらないかぎり、いつまでも市民は、出来合いの物語に沿って展示された資料を「感心して」眺めて帰るだけの、受動的な立場に置かれてしまうからである。

私は一昨年、「小林多喜一を読み直す」という連続講座を十回開き、その冒頭で「現代文学者のうち、現在最も研究が停滞しているのは、小林多喜一と宮本百合子だが、それは日本共産党がこの二人の読み方を管理してきたためだ」と言った。多喜一の地元の文学館でこのような発言をすることは、共産党をはじめ、反体制的な文学（研究）者が作ってきた「多喜一物語」に対する挑発でもあった。型通りの物語には回収できない多喜一文学の多様な可能性を引き出そうとする、この試みは、市民の共感を呼んだらしく、多い時は九十名、少ない時でも七十名ほどの人が足を運んでくれた。今年の二月、多喜一の生誕一〇〇年を記念する企画展を開き、シカゴ大学のノーマ・フィールド教授に講演をしてもらったところ、二五〇名近い人が集まる盛況ぶりだった。

ノーマさんとの縁は、昨年四月、ワシントンD・Cで開かれた学会で一緒したことに始まる。私の『感性の変革』の翻訳 *Transformations of Sensibility: Phenomenology of Meiji Literature* をメジガン大学の出版局が出すことになり、それを記念する「変革の感性」(Sensibilities of Transformation) というシンポジウムを、学会が認めてくれた。「感性の変革」を「変革の感性」とひっくり返した、主催者のシャープな批評意識と、パネラーのノーマさんが小林多喜一の『宮養検査』を取りあげ、私の「無人称の語り手」という概念の有効性を論じた、その着眼のよ

さに、私は感心した。コーネル大学のブレット・デュバレ教授とノーマさんとの間で、「感性」という概念をめぐる議論が交わされる。私は自分の仕事がそのように発展させられてゆくのを喜び、ノーマさんの発表原稿を小樽文学館の館報に頂戴した。それが機縁となって、ノーマさんが小樽へ来てくれたのである。

八月に小樽で行なうシンポジウムには、ノーマさんの大学で、日本と韓国のプロレタリア文学の比較研究をしているサミュエル・ペリーさんが参加する。

市民が物語を作る

伊藤整については、今年、「林檎の文学誌」という講座と文学散歩を行なうことにした。伊藤整の『雪明りの路』は、日本で初めて「林檎の花に寄せる抒情」を定着した詩集と言えるが、「林檎」という、近代に西洋から入った果樹が、どのような経路で余市に入り、その花が一人の若者の感性を養うことになったのか。そのように関心を広げてみると、土族の殖産や、果実の産業化という近代の歴史が視野に入ってくる。他方、林檎の実は、美空ひばりの「リンゴ追分」をはじめ、数え切れないほど沢山の歌謡曲に歌われてきた。これは日本人のどんな心性を表現しているのだろうか。もちろん私自身も文学の関係でおしゃべりするが、これらのテーマを立てて、その方面の知識を持つ市民に講師をお願いし、既に二回行なった。市民手作りの総

合的な講座を幹旋する企画と言えるだろう。

文学館はお仕着せの物語を押しつけるのではなく、市民が自分たちの物語を作る場所なのだ。このように発想を転換して、昨年は「小樽・札幌 喫茶店物語」という特別展で、文学青年の情報交換の場でもあった喫茶店の雰囲気をも再現し、続く「小樽 博覧会の時代」では、小樽で五回開かれた博覧会の記憶を掘り起こし、現在は「小樽 市場物語」で、市場感覚の交流を復活しながら、同じく記憶の掘り起こしを行なっている。

「場」の多様性を求めて

小樽はこのように、市民と色んな夢を描くことのできる場所なのだが、東京や札幌の人にはそう見えないらしい。時々同情半分、憐憫半分のニュアンスで「ずいぶん不便な所に拠点を移しましたね」と訊かれる。それに対しては、館長就任の際の講演「中野重治と北海道」の、次の言葉が答えとなるだろう。「例えば小樽という地域はどういうトポス、つまり場所なのか。そう問いかげられた時、多くの人には日本列島を頭のなかに描きながら、この日本列島の北方に位置する島の、一つの港町として説明するのではないかと、思います。それは日本という国の枠組みのなかで小樽の地理的、経済的、文化的な位相をとらえていることになるわけですが、しかし、なかには、主にサハリンやウラジオストクとの関係で小樽の地理的な位相を考える人もい

るかもしれません。」「私たちはついうっかりと、東京というか「中央」というか、とにかく中心化されたトポスで起こった出来事を歴史的な事件として意味づけ、自分のトポスの出来事もそれとの関係を探しながら、歴史的に整理したり、意味づけたりしてしまう。」「このように、一つの地域というのは、誰がどのような関心で、どこと比較するかによって、さまざまな側面をあらわしてくる。ですから私たちがクロノ・トポスという認識を大事にしようというのは、一つの枠組みのなかで、ある特定の地域との比較によって見出した特徴だけを、自分たちのトポスの「本質」として固定してしまうのではなくて、枠組みを変え、多様な比較対象を設定することによって、このトポスの多源性を明らかにし、その豊かさを再発見しようという、学問的な目的があるからです。」

かつて北海道では、北海道文学論が盛んに行なわれ、強靱な自我、リアリズム、反権力的性格などのコンセプトによる、北海道文学全集が刊行された。それは風土が育んだ文学の独自性を宣揚する運動であったが、そのコンセプトから分かるように、既成の近代文学（史）観に依存し、むしろそれを補強するものでしかなかった。ばかりでなく、そのコンセプトをカノン化した結果、かえって停滞を生んでしまった。「場」の多様性を掘り起こすことは、そのカノンを相対化する試みでもある。(二〇〇三・六・三〇)

歴史に見る福岡の書店

鳥巢 京一 (福岡市総合図書館学芸員)

江戸期の「本屋」

江戸期の出版業は、本屋、書物店、書林、書肆など、様々な名称で呼ばれていた。今日の本屋(書店)は販売業のみを行う業者をいうが、江戸期の本屋は出版・販売の双方を行っていた。

出版文化の成立と発展は、寛永期以降、京都を中心として展開し、寛文期には大坂でも定着、前後して江戸でも活発化し、他の文化と同様、この三都が江戸期通じて中心であり続けた。さらに、十八世紀初頭、享保の改革の一環として同七年(一七一二)、出版条目(出版書物の検閲、板元の版權確立等)による法令の整備によって出版業はさらに盛行し、十九世紀になると、三都以外の各地や九州でも出版活動が認められるようになる。

福岡藩では、寛政十二年(一八〇〇)には儒・医、山崎普山の『農家訓』が刊行されている。「慶応二年博多店運上帳」(榎田神社蔵)によれば、慶応期博多には「書物店」

を営むものとして、糺屋番の萬玉堂次助、新川端下の紅屋善右衛門、中島町の綿屋弥吉の三名が名を列ねている。また、「印判板行彫刻」屋が西町上の藤兵衛、新川端下の越後屋藤五郎、川端町の忠七、対馬小路町上の判屋善兵衛の四名いた。この他、福岡町に泰成堂、太宰府に笹屋等という「書物店」がみられ、出版物そのものは三都大板元の整備されたそれとは違うものの、順調な発展ぶりを示すものといえよう。もっとも、こうした「書物店」が明治期に続行されたか否かについては、史料的に明らかではない。

近代的書店の出現

明治初期の福岡には書店が、真海書店、博文社、山崎登書店など数えるほどしかなかった。

福岡に書店文化が根づくのは、教科書の出版、および取次・販売店が登場してからである。まず、明治十八年(一八八五)、藤井甚太郎・林斧助・古賀男夫らが共同で下名

島町に星文館を設立し、教科書の出版・販売を行った。

また、同二四年（一八九一）、大阪積善館が中島町に福岡支店を開設して教科書と日記類の販売にのりだす。この積善館福岡支店は、初代支店長の山田安蔵、二代目三田村と続き、業績を伸ばしていくが、大正五年（一九一六）に教科書商戦（真海書店の高田芳太郎ら）に敗れる。それがきっかけで積善館福岡支店は閉鎖が決まり、当時主任の八木外茂雄が在庫書籍をすべて譲り受け、同年十月に積文館支店（のち積文館書店）を開業する。第一次大戦の好景気にも支えられ、積文館は順調に滑りだす。同店は同十三年（一九二四）、広さ七十坪、三階建という洋館風の新店舗を建て、翌年（一九二五）八月には資本金十万円の名合会社となる。昭和十年版の『全国書籍商総覧』（新聞の新聞社・一九三五年）によれば、「洋館三階建の広壮なる店舗にて書籍、雑誌、文具の販売を営み、東海堂、北隆館、柳原書店、大阪宝文館と取引をなし、中教を一万五千元、国定を十校へ、千円販売する他、単行本を一ヶ月に約一万五千元に上る破天荒なる売上高あり、（中略）月に日に莫大なる利潤を挙げ、営業税百五十円、所得税二百五十円を納入す」とあり、昭和十年前後の積文館の景況ぶりが窺える。

金文堂の興亡

この積文館のライバルだったのが久留米の金文堂である。金文堂は、文久元年（一八六一）に菊竹儀平が開き、漢籍

を販売していた二文字屋を祖とする。病弱な父儀平にかわり十八歳で経営を任された菊竹嘉市は、良書をいち早く手に入れるため関西、東京の版元を回ったとき、京都でみた金閣寺や教科書出版の雄・金港堂にあやかっただけの名をつけた。そこで育った弟子が独立する時は、屋号に「金」の文字を使うことを許されるという伝統が生まれた。現在でも九州各地には「金」の文字を使った書店が数多く存在し、金文堂という組織が活動している。

明治二二年（一八八九）一月、金文堂の看板を掲げた菊竹嘉市は、「薄利多売」、「経費節約」、「人物養成」をモットーに東京の博文館、富山房といった出版社をはじめ、新聞各社、取次店などといち早く取引契約を結ぶ。販売員が九州各地をまわる外商販売方式を採用して書籍を大量に流通させるとともに、「小説買うなら金文堂」というキャッチフレーズを作ったり、博多・久留米間の鉄道開業にあわせて時刻表を無料配布したりするなど、広報活動を積極的に行う。この時期の大書店は、小売だけでなく、書店の取次なども兼ねていたが、金文堂は取次においても手広い展開をみせている。

こうして金文堂は明治三八年（一九〇五）に福岡県国定教科書特約店になるし、大正八年（一九一九）に結成された福岡県書籍商組合でも、菊竹嘉市が百四名を統率する初代組合長に就任する。

この金文堂が閉鎖した積善館の旧社屋をひきとるかたち

で福岡に進出し、金文堂福岡支店を開設するのは大正五年（一九一六）十一月のことであった。大正八年（一九一九）三月、同支店は株式会社となる。

昭和二年（一九二七）金文堂は経営がうまくいかず株式会社を解散。金文会員に出資金を払い戻したうえで、新たに合名会社菊竹金文堂を設立する。昭和十三年（一九三〇）四月、天神町四ツ角にあった博聞社を買収し、二文字屋書店の看板で開業するなど様々な試行錯誤を続ける。だが、やがて戦時下に内務省が示した出版取次界の一元化策によって、日本出版配給会社に強制吸収されることで取次業としての歴史にひとつの幕を降ろすことになる。

丸善の進出

積文館と金文堂が熾烈な営業競争をくりひろげるなか、全国的な大型書店として最初に福岡に営業所を開いたのは丸善である。丸善は明治四四年（一九一一）、九州帝国大学（京都帝国大学福岡医科大学は明治三六年に設置）が創立されたのを受けて、工科大学がある粕屋郡箱崎町（現在の福岡市東区）に出張員詰所を置いた。その後大学関係の書籍を一手に取扱うようになり、大正二年（一九一三）には福岡市上西町にモルタル二階建の店舗を新築し、同年九月には出張員詰所は福岡支店に昇格することになる。

丸善は、こうして明治四三年（一九一〇）に開業した市内電車（大学前⇩西公園、呉服町⇩博多駅、福博電気軌道）

に乗って街にくりだす学生を集めて、文具、書籍とともに洋品類等も販売して業績をのばしていく。昭和十九年（一九四四）の火災で店舗を失い、翌年の六月十九日の福岡大空襲で全焼する。しかしその都度店舗を再建し、同三二年（一九五七）には、九州に初めての大型店舗（五階建、延五五〇坪）を構えることになる。

博文社の隆昌

次に博文社は明治初期から、すでに福岡の地で書店を営業していた書店で、店主は森岡栄である。それが明治三三年（一九〇〇）に出版社として事業に乗り出し、息子の森岡熊彦が跡を継いでいく。以降、この博文社からは昭和初期まで数多くの出版物が刊行されている。興味深いのは「博文社」と「森岡書店」とを使い分けながら出版活動を行っている点である。それぞれの商号については、区別の基準も史料的に詳らかではない。なお、博文社は昭和七年（一九三二）年十一月に当時の経営者・松木富士雄によって社名を株式会社博文館書店と改称され、天神への進出を果している。前掲昭和十年版の『全国書籍商総覧』によれば、「日本式二階建の堂々たる店舗にて書籍、雑誌、文具等の販売を営み、東海堂、大阪宝文館九州出張所等と取引を行い、一年間に単行本二千四百五十円、国定を一校へ二千円、中等教科書を一万五千円、文具を五百円販売する外雑誌を一ヶ月に二千円、（中略）年平均売上総額六、七万円

を算するの盛況にあり、資本金二万円、資産二万円を要する同店は微動だにもせぬ店礎の上に時々刻々隆昌に赴きつつあり」と、新店舗の状況を伝えている。

大坪惇信堂の発展

ついで明治二八年（一八九五）に大坪万六が佐賀市において創業し、全国有数の書店に数えられるほどに成長していた大坪惇信堂が取次業の本拠を福岡市渡辺通に移したのちは昭和十年（一九三五）八月である。二六〇坪という、当時としては破格の社屋を準備した同店は、「東京出版九州共同販売所」の看板をかかげて新天地での業務を開始している。昭和十一年（一九三六）発行の『九州産業大観』（九州日報社）には、「かくて昭和十年八月福岡市渡辺通りに荷物エレベーター、自動式温水暖房其の他の最新設備を誇る新築が落成したので、卸部の本拠を福岡に移転し、今や一般書籍、雑誌、中等教科書の大取次として業界に燦然たる光を放っている同店の一大特色は、堅実な科学的経営法にして、店内の整然たる組織は模範的と定評があり、（中略）地の利と人の和に恵まれた同店の前途は殊に洋々たるものがある」と、その当時の様子を述べている。

九州共同販売所の盛況

昭和十二年（一九三七）、福岡に九州共同販売所が設置される。同年四月二五日付けの「福岡日日新聞」によれば、

「福岡市に設立の九州共同販売所の盛況」という見出しのもと、「……四月一日開店以来、同所陳列場は多数の参読者で賑わっている。九州帝国大学の学生が、福岡市にも斯んなに本の揃った店があるか」と驚いている。福岡市名所として読書子の是非訪れるべきである。（中略）福岡市の特約販売店は積文館、丸善書店、黒門書店其他であるが、九州及び鮮満、台湾各地方全部にあるから便利だ、東京出版所全部の共同倉庫である」とあり、同販売所の活況ぶりが窺える。また、それにもなつて福岡は、九州はもとより朝鮮半島や台湾に書籍を流通させる窓口としての役割を果たすようになってきている。つまり、福岡が大陸と最も近いこととなりつつあったのが昭和十年前後であったともいうことができよう。

〔付記〕本稿は、福岡市総合図書館編『本』を創る―フクオカ出版物語―（二〇〇三年）の一部を要約したものである。

本稿の詳細については、前掲『本』を創る』を参照されたい。

直立二足歩行

青木淳一

地球環境の破壊は、ヒトという極めて特殊な生物の出現によってよい。では、なぜヒトは特殊な生物になりえたのか。それはわれわれの祖先が二本足で立ち上がった歩きはじめたことによる。ただ二本足で歩くのなら、中世代の白亜紀にヒトよりもはるか前にティラノザウルスなどの肉食恐竜がやっていたことである。今でもヒト以外にカンガルーは二本足でピョンピョン跳ねている。しかし、その時背骨はほぼ水平に近く保たれ、前に倒れないように太い尻尾でバランスをとっている。ヒトの場合は背骨が真っ直ぐに立った。つまり直立二足歩行である。

そのことがなぜヒトを特殊化させたか。それは脳重の増加と関係がある。ために、重たい本を数冊風呂敷に包んで結び目を口でくわえ、床を四つん這いになって歩いてみるとよい。たちまち首が疲れてダウンしてしまう。しかし、立ってその風呂敷包みを頭に乗せて歩いてみると、まったく楽に運ぶことができる。つまり、直立した背骨は脳が重たくなっても、それを支えることができたのである。それと相俟って、二足歩行によって歩行運動から解放された前足は「手」としての働きを許されることになる。そして、手は道具を使うことを可能にし、それは更に脳の発達を促した。一方、今まで口が行っていたことを手がやってくれるため、口は力仕事から解放され、口は出っ張らなくなり、顔面に引っ込み、頬が口を覆った。そのことは、さまざまな音声を発することを可能にした。ワニのように口が出っ張っていたら、「ガアー」くらいは言えても、「ピュ、ミョ、ニョ」などの複雑微妙な発音はできるわけがない。この言語の発達はますます脳重を増加させていったのである。

かくして重たい脳を持った生物ヒトは、道具を使い、火を使い、大型動物を捕獲し、家畜を生みだし、作物を栽培し、地球上における生息数を爆発的に増加させていった。さらに、ダイナマイト、チェーン鋸、ブルドーザーなどの機械は瞬時のうちに地形や植生を変え、大規模な自然破壊が始まった。考えてみれば、ヒ



頭上に魚の桶
をのせて運ぶ
沖縄の女性

トの祖先が直立二足歩行をはじめた、ただそれだけのことが現在の地球環境問題の発端だったのである。

ヒト以外の動物の世界を見渡してみると、ある種の動物が増えすぎた場合には、かならずそれを抑制する現象が起きる。たとえば、病気が蔓延する、天敵が増えてくる、弱いものが取り残される、殺しあいが始まるなど、「密度調節作用」が見られる。ヒトの場合には、この機構が働かない。誤解を恐れずに言えば、ヒトの外敵となる強い動物を殺す手段、飼育栽培技術の発達、医学の進歩、戦争抑止などが、密度調節作用をはねのけてしまう。そこで困り切った天がわれわれ人類に与えたのが、ミクロな敵であるウイルスと精神障害なのだと思う。もう一度誤解をされないように言うが、殺しあいをして増えすぎた人口を減らせとやっているのではない。ヒト以外のほとんどすべての動物が「平気で」やっていることを人類はできない（人類は許さない）のだから、それこそ人類の叡智を使って他のことを考えなければいけないということであろう。

対数目盛りのグラフを用意し、横軸に動物の体長、縦軸に動物の生息数をとって、さまざまな動物の値を記入していくと、その点は右下がりの一直線上にほぼ並ぶ。つまり、「体の小さい生物ほど多く、体の大きい生物ほど少なく住みやすい」という自然の掟がある。そして、ヒトはこの掟を完全に無視している。地球生態系の中で、本来生物としてのヒトは、一昔前のオランウータンやチンパンジーと同じくらいの数でいるべきなのである。

（神奈川県立生命の星・地球博物館）

渋谷区立松濤美術館



雪村展カタログ表紙より

渋谷区立松濤美術館を紹介します。

最近、この美術館の企画展をベースに、一冊本を出しているので（矢島新・山下裕二・辻惟雄『日本美術の発見者たち』）、単なる一ファンを超えたスタンスで紹介することになることを、まずお断りしておきます。

二〇〇二年の四月から五月にかけて、上野の東京国立博物館で「雪舟 没後五〇〇年特別展」が華々しく開催されていた同時期に、渋谷の区立松濤美術館では、「雪村展 戦国時代のスーパード・エキセントリック」が開かれていました。

雪舟と雪村。専門家ならともかく、雪村は一般にはほとんど知られていない人物でしょう。二つの展覧会の主催者が、それぞれをどのように紹介しているか、カタログをみてみます。「日本を代表する画家」（主催者＝東博・毎日新聞・TBS）雪舟、「戦国時代、一六世紀に現在の茨城県や福島県を中心に水墨画を描いた禅僧」（主催者＝松濤美術館）雪村、とこういう次第です。「中国画のスタイルを真似ようとした当時の多くの水墨画家とは違い、内面からわき出る自己のイマジネーションを、大胆に画面にぶつける」画家、雪村の展覧会の意図を、監修者の山下裕二教授（明治学院大学）はこう言っています。「この展覧会は、雪村の「せ」の字もご存じない人たちにこそ、見てもらいたい。ともかく四〇〇年以上前に、こんなに面白い絵を描いて、それがたくさん伝えられているんだから、まずは見てみませんか」（カタログより）。

松濤美術館は、「雪舟展」の向こうを張ったこの「雪村展」にみられるように、一九八一年の開館以来、個性的な展覧会を次々と行ってきた区立美術館です。松濤の最大の特徴は、自前の収集を積極的には行わないで、自主企画を立て、展示は借用によって行うという点でしょう。要するに企画がすべて。学芸員の矢島新氏は、「東京の地方美術館」と位置づけ、個性的な企画展をやってもそれなりに集客が可能なのは、大都市東京に在るからだと解説してくれました。

所在地 〒150-0046 東京都渋谷区松濤2-14-14
 山手線渋谷駅ハチ公口より徒歩15分、
 井の頭線神泉駅より徒歩5分。

開館時間 9:00～17:00 (ただし、入館は16時30分まで)

休館日 月曜日(ただし、祝日は除く)、国民の祝日の
 翌日、年末年始(12月29日～1月3日)、陳列
 替え期間中(要電話確認)。

入館料 一般300円(特別料金の場合もあり)

電話 03-3465-9421 F A X 03-3460-6366

URL <http://www.city.shibuya.tokyo.jp/ku/est/guide/museum/museum.html>



長引く不況の下、美術館や博物館をとりまく状況のきびしさは容易に想像できます。池袋のデパートにあったセゾン美術館や東武美術館はいつのまにか姿を消し、国立の美術館・博物館は、行政改革の一環で独立行政法人となり、営業努力で入場料収入を上げることが求められるようになりました。京都国立博物館は何と「スター・ウォーズ」展を開催し、東京都現代美術館は「ジブリがいっぱい」展をもってきました。国内最大の古美術、東洋美術のコレクションを持つ東京国立博物館は、開館(一八七二年)以来初めての常設展示の大改革を始めています。松濤美術館の入館者をみるとこの一〇年、年間ほぼ五万人を推移して一番入った年が六四〇〇〇人。予算削減の中で入館者が減っていない現状は、美術館の底力でしょうか。ちなみに今まで一番入館者の多かった展示は、二〇〇〇年の「セーヌの岸辺から 村山密」展で二三〇〇〇人、「雪村」展は一七〇〇〇人(東博「雪舟」展は三〇万人!)。私が一番興奮した「ZENGA 帰ってきた禅画」展は一〇二〇〇人の由。

松濤美術館は、渋谷駅から歩いて約一五分。人があふれている谷底のような駅前交差点を抜け出して東急本店前を左に上ると、閑静な住宅街の一角に、ヨーロッパ中世の城の外壁を思わせる石造りの落ち着いた建物が現れます。白井晟一設計の地上二階地下二階の建物。近くには、つい最近まで法の華何とかの変な建築物もありました。渋谷の雑踏がいやなひとは神泉駅からどうぞ。歩いて五分。

今年度の企画のライン・アップを挙げておきます。「木綿の島々 インドネシアの染織」(七・二九～九・七)、「トルコ現代絵画展及び合同手工芸品展」(九・二三～一〇・五)、「合田佐和子 影像」(一〇・一四～一一・二四)、「谷中安規」(一一・九～一二・一)。谷中って誰だろう。内田百閒に愛された版画家? 知らない。しぶすぎるような気もしますが、私は見に行きます。「入館者等の数字は、「松濤美術館二〇年のあゆみ」から引きました。」(東京大学出版会 羽鳥和芳)

大学出版部ニユース

▼協会創立四〇周年記念事業

日本大学出版部協会は、創立四〇周年を迎えた本年度、いくつかの記念事業を計画・実施しています。ここでは、その主だったものを紹介します。

① 創立四〇周年記念ブックフェア

営業部会が中心になり、四〇周年記念事業の一環として、以下のような記念フェアが各地で計画・実施されています。

- ① 大学生協店頭ブックフェア
以下の大学生協一〇校一五店にて順次開催していきます。
東北大学生協、慶應義塾大学生協三田店、慶應義塾大学生協日吉店、中央大学生協、東京大学生協本郷店、東京大学生協駒場店、法政大学生協市ヶ谷店、法政大学生協多摩店、早稲田大学生協コープB/C、早稲田大学生協文学部店、名古屋大学生協南部店、名古屋大学生協北部店、京都大学生協ルネB/C、大阪大学生協、九州大学生協文系店、九州大学生協六本松店

②

オンライン・ブックフェア
三省堂書店のウェブサイトに、特集としてオンライン・カタログを掲載、書籍紹介と販売を行っています。また協会のウェブサイト上でも同様の試みを行っています。

③

八重洲ブックセンターフェア
二〇〇四年初頭に、八重洲ブックセンター本店一階の特設売り場にて、二〇〇〇冊を展示するフェアを予定しています。

④

丸善外商部カタログ販売
二〇〇三年六月〜九月に、丸善学術情報ナビゲーション事業部の協力により、カタログ販売を実施中です。大学生協カタログ・ブックフェア

⑤

全国十余の大学生協において、カタログ・ブックフェアを予定しています。東京国際ブックフェア拡大出版

⑥

二〇〇三年四月に開催された「東京国際ブックフェア二〇〇三」には、例年の二倍のスペースで出展し、過去最高の販売実績およびブース来場者数を記録しました。

カタログ・ブックフェア 2003



大学と社会を結ぶネットワーク
大学出版部協会
創立40周年記念

● 編集委員
1 協会の発展を促すための本 代表取締役 1
2 大学の教育 責任 責任 4
3 及び社会を考える 社会科 9
4 現代の人間性 科学・技術・文化・倫理 12
5 科学技術を考える 科学・技術・文化・倫理 15
6 歴史・文化・芸術 16

「四〇年の歩み」刊行

協会創立四〇周年を記念して、「日本大学出版部協会四〇年の歩み」を一月刊行予定で製作中です。過去に製作した「三五年の歩み」を踏襲しつつ、アメリカ・韓国・中国の大学出版部協会からの祝辞をはじめ、協会の活動実績としての国際交流の軌跡、日本生命財団出版助成図書一覧、機関誌「大学出版」第一号から現在までの総目次などを追加し、より資料性の高い記念誌になっています。

創立四〇周年記念 感謝の会

例年行われている年末例会・懇親会を拡大し、一月五日、一ツ橋の学士会館本館において「日本大学出版部協会創立四〇周年記念 感謝の会」を開催します。

北海道大学図書刊行会

▼酒井昭著『植物の耐寒戦略』（四六判・二二〇〇円）植物はどこまで寒さに耐えられるか、凍るのか凍らないのか、なぜ凍っても生きられるのか？植物の寒さへの高い適応能力獲得の仕組みと、極地から熱帯までの多様な生存戦略を詳述する。▼田嶋謙三・塩谷雄・大高全洋著『北大寮歌「都ぞ弥生」の作詞者 小作官・横山芳介の足跡』（四六判・二〇〇〇円）生い立ちから「都ぞ弥生」の作詞に至る経緯、農科大学卒業後の歩みを詳細にたどり、開明的実務家「小作保護官」として、農民の側に立って地主との調停にあたった横山芳介の実像に光をあてる。▼廣川晶輝著『万葉歌人大伴家持』（A5判・五〇〇〇円）「模倣」として片づけられてきた作歌法を、「歌まなび」と捉え、新たな視点から家持の歌作りの営みの軌跡を追う。作品そのものに焦点を絞り、「歌人」大伴家持の姿をあぶり出す鋭い力作。▼北村清彦著『藝術解釈学』（A5判・六〇〇〇円）仏・現代哲学の第一人者ポール・リクールの思想を敷衍し、藝術理解の可能性を論じる。美学・藝術学の新しい可能性を提起。

東北大学出版会

▼日本海洋学会「海を学ぼう」編集委員会編『海を学ぼう―身近な実験と観察』（A4判、六五頁全カラー、一五〇〇円）海は地球環境の中で、大きい役割を果たしている。しかし、小学校から高校までの教科書にはほとんど書かれていない。この本では、海水の化学、海の生物、海の物理現象の中から身近な題材を選び、この本を手にした人が自主的に学習できるように、工夫されている。本書は、総合的な学習の時間や選択の時間での良い手引き書ともなっている。▼栗原隆編『知の地平―大学におけるマルチリテラシーと応用倫理』（A5判、三三二頁、一五〇〇円）多様化し、しかも高度に専門化した大学にあって、自然科学系と人文科学系に共通の知的リテラシーの必要性が高まっている。本書は、「情報倫理」、「メディア・リテラシー」、「コミュニケーションの作法」、から「生物のストラテジー」、「物作りの倫理」、「生命倫理」をも含めて、大学で学ぶ上で必須である倫理を分かり易く説く先駆的な試みである。

流通経済大学出版会

▼田多英範編『現代中国の社会保障制度』（予価三〇〇〇円）中国で市場経済化が始まってからすでに四半世紀が過ぎようとしている。この市場経済化の下で、従来からの労働保険制度を中心とした中国の社会主義的生活保障制度は、大幅な改革を余儀なくされている。とりわけ一九九〇年代後半以降には以下のような改革が相次いだ。年金保険制度や医療保険制度は個人口座と社会プールを結合した制度に改められ、その保険料は政労使のいわゆる三者負担に変えられた。国有企業改革との関連で失業保険制度が創設された。また失業保険制度ではカバーできない長期失業者をも受け止める公的扶助制度が整備された等々。これら一連の改革は、基本的には未だ都市に限定されているが、市場経済化に対応した社会保障制度体系の構築過程ともいえる。本書は、以上のような中国の社会保障制度改革の実態や背景を分析し、さらに最新の各制度について詳細に紹介したものである。

聖学院大学出版会

▼聖学院大学宗教センター編『神を仰ぎ人に仕う——キリスト教概論・二一世紀版』(A5判、一一〇〇円)

学校法人・聖学院は、幼稚園から大学院まで十の学校からなる。その建学の理念である「神を仰ぎ人に仕う」を主題に掲げた本書は、聖学院大学の基本的な科目である「キリスト教概論」の教科書として編纂されたものである。

「本書は大学においてはじめてキリスト教に触れ、それを学ぶ人にも、『キリスト教とは何か』を的確に伝えようとしています。キリスト教とは何かを知ることが、現代文明の中で大学教育を受けるにあたって必須であると確信し、その本質を伝授しようという意図している」(「はじめに」より)のである。

大学の歴史をひも解くとキリスト教の神学研究から始まり、多くの学問分野に教育研究の対象がひろがってきたが、学問のそもそもの根底にある真理に対する問い「真理とは何か」からもう一度、大学において学ぶ意味、あるいは生きる意味を若い学生たちに一緒に考えよう、と語りかけている。

麗澤大学出版会

▼速水融著『近世日本の経済社会』(四六判上製・三二八頁、二八〇〇円)

日本の近代化および高度成長の基礎にある「日本人の勤勉さ」の源は江戸時代農民の「勤勉革命」にある——実証的研究により、伝統的歴史観に代わる独自の経済史観をうち立てた著者の代表的著作。関連論文五篇を収録。著者は歴史人口学のパイオニア。現在、麗澤大学教授。

▼K・デュルクハイム著／下程勇吉監修 落合亮一他訳『肚——人間の重心』(四六判上製・三六〇頁、三二〇〇円)

「肚」を鍛え、身体の重心を肚におくとき人は己れを超えた自然の根拠力と結ばれる。——日本人が忘れていている東洋古来の智慧の意義と実践を説く世界的名著の復刻。著者は戦時中の日本で日本の伝統文化を学び、それらに通底する「肚」を哲学的に解明したドイツの哲学者。



『肚——人間の重心』
本体3,200円(税別)

慶應義塾大学出版会

▼ワイルド・ハックラー著・奥田敦編訳『イジュティハードの門は閉じたのかーイスラーム法の歴史と理論』(四八〇〇円)

国際的に注目される巨頭の本邦初の翻訳書。西側オリエンタリズムの本説を、膨大な資料から覆す画期的論考。

▼施光恒著『リベラリズムの再生——可謬主義による政治理論』(四八〇〇円)

欧米で生まれたリベラリズム理論を、世界的に適用可能なものにするための理論構築に挑んだ、新進研究者の画期的提言。

▼新田義孝・吉岡完治・早見均編『アジア環境——とも凶鑑』(一八〇〇円)

アジア諸国のナマの日常生活に取材し、こどもが環境を等身大の問題としてとらえられるようにつくられたユニークな写真集。

▼櫻井雅夫著『レポート・論文の書き方上級 改訂版』(一八〇〇円)

注や文献の表記法についての詳細をきわめた実例に定評のあった旧版を、さらに使いたやすく増補改訂。論文体裁マニュアル決定版。

▼寺崎修編『福澤諭吉著作集7 通俗民権論 通俗国権論』(二六〇〇円)

「国家を築くには、「官」にのみ依存せず、「民」の力を高める必要を説いた政治論集。

産能大学出版部

- 厚生労働省実施「ホワイトカラー職務能力評価試験」テキストとして最適な4冊
- ▼西澤隆二編著『生産管理実務（製造部門担当者編）』（二〇〇〇円）
- ▼西澤隆二編著『生産管理実務（設計部門担当者編）』（二〇〇〇円）
- ▼西澤隆二編著『生産管理実務（設計部門担当者編）』（二〇〇〇円）
- 設計や製造活動における問題点を正しく分析し、見分ける目を養い、効果的な問題解決手段の知識習得を目指す。生産管理実務の基本書。
- ▼梶原豊編著『人事管理実務』（二〇〇〇円）
- ▼梶原豊編著『労務管理実務』（二〇〇〇円）
- 人事・労務管理を体系的に整理し、活用できる基本的実務書。労働の場をより良いものに改善・充実するための指針書として活用いただける。
- ▼井出眞弘著『Excelによる産業連関分析入門』（二〇〇〇円）
- 産業連関分析の基礎理論と実証分析を解説したもの。高校教育で学ぶ程度の線形代数の知識があれば習得できるようにやさしく解説。

専修大学出版局

専修大学社会科学研究所では全学部から所員が参加し学際的な活動を行っている。一九九九年に創立五〇周年を迎え、記念事業の一環として社会科学叢書の刊行が開始された。本叢書は社会科学の諸分野からトータルな視点で錯綜する現代社会の解明を試みている。これまで5タイトルが刊行され、今後も新企画による続刊が予定されている。

- ①グローバリゼーションと日本（専修大学社会科学研究所編、三五〇〇円）
- ②食料消費のコウホート分析―年齢・世代・時代（森宏編、四八〇〇円）
- ③情報革新と産業ニューウェーブ（溝田誠吾編、四八〇〇円）
- ④環境法の諸相―有害産業廃棄物問題を手がかりに（矢澤昇治編、四四〇〇円）
- ⑤複雑系社会理論の新天地（吉田雅明編、四四〇〇円）



大正大学出版会

- ▼青木聡・福田周・卯月研次共著『臨床心理学のための調査研究入門』（二五〇〇円）。
- 臨床心理学の分野で活用できる心理統計法調査研究法の実用入門書。統計ソフトSPSSの操作を含め、数学の苦手な学生に初歩からわかりやすく統計法概念を解説している。
- ▼司馬春英著『唯識思想と現象学』（八五〇〇円）
- 唯識思想と現象学とを比較思想の視点から対比させ、それらの核心をなす哲学的な洞察を抽出することによって、両者の新しくかつ現代的な解釈の可能性を探ろうとしたもの。著者の出発点は、フッサールが自らの現象学に冠した「超越論的」という言葉の持つ独自の意義はどこにあるのかの問いにあった。フッサールが直面していた超越論的反省の限界点において生起している出来事的事象構造を、唯識思想の阿頼耶識縁起論と三性説との関わりのなかに探り出そうとする。現象学と唯識という異なる生い立ちを持つ思想の営みを比較・関連させながら問題を追求する。

玉川大学出版部

- ▼多田建次著『海を渡ったサムライの娘 杉本鍼子』(一九〇〇円) 激動の維新时期、厳格な躰を受けて育った杉本鍼子は、異文化と出会い、自伝『武士の娘』(A Daughter of the Samurai)を著した。モラルに照らして行動した鍼子の人間像を『福翁自伝』の論吉と対比しながらさぐる。
- ▼加藤恭子、ジョン・ハーヴェイ著『ニューイングランドの民話』(一九〇〇円) 合衆国史発祥の地ニューイングランドに残る豊富な民話を、日本人と生粋のニューイングランド子が協力し採集したもの。アメリカ版遠野物語。
- ▼入江隆則著『文明論の現在』(二二〇〇円) 保守派の論客が、文明論的状况からアメリカとは何か、激動するアジア、太平洋文明論、あるいは戦略論のすすめなど縦横に論じ、存亡の危機に立つ日本の進むべき路を考える。
- ▼有本章編『大学のカリキュラム改革』(四二〇〇円) 教員・学生の調査結果から、不十分なカリキュラムの体系的編成、教養教育のアンミ状態など、学士課程のカリキュラム改革の実態を明らかにし、必要とされる課題を提示する。

中央大学出版部

- ▼ローベルト・ムーゼル著／園子修平・岡田素之・早坂七緒・北島玲子・堀田真紀子訳『ムーゼル・エッセンス―魂と厳密性』(二六八〇〇円) 主著『特性のない男』でジョイスやブルーストと併称されたムーゼルの創作の源に分け入る。三二作品中一九作品が待望の本邦初訳！
- ▼日本比較法研究所研究叢書六二 小島武司編『ADRの実際と理論I』(四〇〇〇円) 実務・学理の両面から裁判外紛争処理(ADR)の実情を把握し、確固たる理論を形成するための基盤づくりを目指す。
- ▼日本比較法研究所研究叢書六一 白羽祐三著『刑法学者 牧野英一の民法論』(二二〇〇円) 牧野の民法解釈論や法思想は民法学者たちに強い影響を与えた。本書は牧野・民法論を通じて日本民法学の軌跡の一端を明らかにする。
- ▼眞鍋貞樹・竹本善次・岩佐充則著『福祉国家再生への挑戦―国家・社会・個人のベスト・ミックス』(二二〇〇円) 総合的かつ新しい視点から大胆な分析と提案を試み、行き詰まった現代日本の福祉政策を抜本的に改革する方向性を探る。

東京大学出版会

- 佐々木力編「コレクション 数学史」の刊行が開始された。本シリーズは、世界の最前線にある日本の数学史研究の精華を一般向けに紹介。さらに、数学史の古典的傑作と評価の高い著作の翻訳、日本数学の古典の批判版などから構成される。近代思想を語るうえでの必須文献となるだろう。
- 第一期は以下の五巻。①佐々木力著『デカルトの数学思想』(A5判、六二四頁、七四〇〇円) は、デカルトが代数幾何的な数学をどのように形成したのかを、数学的かつ歴史的に再考。②林知宏著『ライプニッツ 普遍数学の夢』(A5判、三二二頁、五二〇〇円) は、『普遍数学』を軸に、思想的巨人ライプニッツの知的格闘の跡を解明。③高橋秀裕著『ニュートン 流率法の変容』(A5判、三五一頁、五八〇〇円) は、ニュートン数学の主要な論考を年代誌的に克明に分析。近刊として、④ロシュデイー・ラーシェド著／三村太郎訳『アラビア数学の展開』、⑤佐藤賢一著『近世日本数学史 その成立と展開』。

東京電機大学出版局

マーティン・ゴールドスタイン他著／米沢富美子監訳『冷蔵庫と宇宙—エントロピーから見た科学の地平—』(四八〇〇円)本書は熱力学とエネルギーをやさしく説き、「エントロピー」という概念が科学全般にもたらした意義を再確認しながら、この数世紀の科学史を俯瞰する。▼量子力学や相対性理論は、それまでの重要な科学理論であった熱力学やニュートン力学をより普遍的に解釈して取り込み、やがて新しい宇宙論・天文学を導くことになる。▼情報科学や通信工学、そして分子生物学まで、科学と日常とが有機的に結び語られ、読者は科学の地平と宇宙の行方を望む高みへと導かれる。



東京農業大学出版会

▼『新・実学の最前線—いのちを守る農学—』東京農大編

「食料」「環境」「健康」「資源エネルギー」「教育」の分野に、東京農大の教育・研究スタッフのうち一人一人が執筆。現在の農学がいかに幅広い領域に及ぶことか。いかに先端的かつ刺激的であることか。副題にあるとおり「生命を守る農学」の、いかに魅力に溢れていることか。一般のサラリーマンや主婦など幅広い読者層を想定しているが、農学を目指す高校生には必読の書といえる。

平成一五年六月／B五判

二四七頁／本体価格一四〇〇円

▼『せたがやの花—写真集 犬と暮らし、花に親しむ—』新村壽夫著・写真

ヒメオウギズイセンが表紙を飾る。かつて東京農大で教鞭を執り、世田谷区等々力に住む著者は、愛犬を連れての散歩の折、身近な花々を撮り続けてきた。それぞれの写真には、春夏秋冬の別が示されているだけで、あとは見る人が想いを創造する「花暦」の世界だ。

平成一五年四月刊／A B判変型

九七頁／本体価格二五〇〇円

法政大学出版局

▼『デイルタイ全集』全十一巻・別巻一(編集代表／西村皓・牧野英二)が刊行開始。あらゆる学問を基礎づけ、人間・社会の総合的な把握を試みる、深遠かつ広大な思想の海洋に挑む画期的全集。

第一回配本、第3巻『論理学・心理学論集』(大野篤一郎・丸山高司編集／校閲：一万九〇〇〇円)では、主著「精神科学序説」の構想に深く関わる重要講義・論稿十一編を集成。生の論理学・心理学・解釈学の新たな樹立をめざし、人間の「生」の全体性に迫る。

▼『デイルタイと現代』(西村・牧野・舟山編：四〇〇〇円)は、周辺の哲学者群像との関係に光をあて、デイルタイの生涯とその時代、思想の全体像を俯瞰する。『全集』を読み解く恰好の導入篇。

▼『デイルタイ』(R・A・マッククリール／大野篤一郎他訳：五八〇〇円)



放送大学教育振興会

▼十五年度開設の話題科目から

『患者からみた医療』（高柳和江・仙波純一ほか著）：インフォームド・コンセントやカルテ開示など、今話題の医療問題を患者の視点から見直そうという科目の教科書。患者は医療者に対して弱者のままではだめ、医者と堂々とわたりあうために医療の常識を知るための本である。―同書「まえがき」より

▼教科書と点訳サークル

放送大学で学ぶ視覚障害のある学生が、点字化された印刷教材を入手しやすくすることを目的に、第一回卒業生を中心に作られた点訳サークルが「菜の花の会」である。年二回「点訳済みリスト」を発行して学生に配布して便宜を図っている。放送大学の授業はこのようなボランティアの力にも支えられているのである。

▼十七年度の作業がスタート

七月十一日平成十七年度開設予定科目の主任講師会議が開催された。専任教員・客員教員、ディレクター、編集担当者等が、全体会議、専攻別部会に出席した。十七年度印刷教材編集作業の正式スタートである。

明星大学出版部

先進諸国では一様に「不登校児」の問題を抱えている。オーストラリアで不登校児問題に取り組む精神科医であり、リベンデル病院の小児・思春期家族療法部門の責任者・クリス・ウェバー医師は

学校へ少しずつ近づき不安を鎮める方法を身につけるプログラムが必要」と、そのプログラムを児童向き絵本に著し、友人の精神科医であり、地域メンタルヘルスサービスのの上級専門医・ニール・フリリップスがイラストを描いて『THE SCHEOL WOBBLIES』を出版した。同書は不登校児やそれに携わる人の間で好評となり、その評価は海を越えて日本の不登校児問題に取り組む心療内科医・田部田 功、森下克也、精神科医・藤岡耕太郎の三医師の所にも届く。三医師の日本語訳『学校いやいやお化け ウオブリー』（一、一〇〇円）を小社より刊行。オーストラリアと日本の医師達が不登校児のために真剣に取り組み、著された絵本によって、今度は日本の不登校児が学校に少しずつ近づいていると、関係者から反響が多く寄せられている。

早稲田大学出版部

▼「これからの学校英語―現代の標準的な英語・現代の標準的な発音」（田辺洋二／五六〇〇円）英語の国際化と自立化が進むなか、日本の英語教育の問題点を指摘し、学校英語を総合的に検証する。

▼『フィンランド現代政治史』（M・ハイキオ、岡沢憲美監訳／三〇〇〇円）独立から現状までの内政・外交の実態を政治リーダーの動向を中心に描く。

▼『マルチメディアと経済・社会』（佐竹元一郎編／四〇〇〇円）パソコンの活用方法、デジタル技術の規格や基準などを取り上げ、マルチメディアを考える。早大現代政治経済研究所研究叢書17。

▼『ブルースト的エクリチュール』（川中子弘／六五〇〇円）「失われた時を求めて」の主人公のエクリチュールを追って錯綜する作品の構造を捉える。



東海大学出版会

▼オフィスマイクのお知らせ

七月一日をもって、当会は湘南校舎に隣接する左記住所に移転しました。

〒二五七-〇〇〇三

神奈川県秦野市南矢名三二一〇一三五
東海大学同窓会館内

TEL 〇四六三-七九一三九二一

FAX 〇四六三-六九一五〇八七

* * *

▼『DVDパックさかなの街 Vol.1〜3』
(A5判・DVD付・各三八〇〇円)

出産する魚、交尾する魚、オスからメスに性転換する魚……。私たちが普段知ることのない魚の求愛から産卵といった繁殖生態を中心に、自然体で逞しく生きる魚たちの社会行動を貴重な映像と軽快な解説で紹介。一卷六種、計十八種の特徴的な魚をテーマに取り上げる。海洋生態学者ジャック・T・モイヤーと水中カメラマンの第一人者の中村宏治が海中世界へさかなの街の不思議と魅力を余すことなく伝える力作。DVDの性能をフルに活かした日本語・英語版の字幕と音声解説付き。また、映像を環境音とBGMで愉しむこともできる。

名古屋大学出版会

▼松澤和宏著『生成論の探究―テクスト・草稿・エクリチュール』(六〇〇〇円)

漱石から賢治、フロアベールからソシュールまで、〈書くこと〉とは何かを問い、その深淵に明滅する豊饒な複数性を読む。

▼牛島信明編訳『スペイン黄金世紀演劇集』(六〇〇〇円) ロペ・デ・ベガからカルデロンまで、ヨーロッパ演劇史の最高峰をなすスペイン黄金世紀の絢爛たる夢幻世界。わが国初の本格的選集。

▼アーサー・O・ラヴジョイ著／鈴木信雄他訳『観念の歴史』(四八〇〇円) ヨーロッパを彩る思想群の壮大な転換を捉えた、今なお最も明晰な西洋思想史の古典にして、ラヴジョイ思想史の到達点。

▼ジョン・ブリューア著／久久保桂子訳『財政Ⅱ軍事国家の衝撃―戦争・カネ・イギリス国家 1688-1783』(四八〇〇円) 強力な戦争遂行国家はいかにして生まれたのか。待望の邦訳。

▼ロバート・D・エルドリッジ著『沖繩問題の起源―戦後日米関係における沖繩 1945-1962』(六八〇〇円) 戦後沖繩の地位を決定付けた講和条約の形成過程を初めて本格的に解明。

三重大学出版会

▼中川 正著『文化の法則を探ろう』A5、一五五頁(一二〇〇円+税)

1章 大発見! 恐怖の法則

2章 法則にはどんな種類があるか

3章 好奇心を手がかりにしよう

4章 問題意識を手がかりにしよう

5章 五感を働かせよう

6章 空間的法則

7章 時間的法則

8章 集団による法則

9章 法則を説明してみよう

10章 意味を解釈しよう

11章 法則を応用しよう

12章 法則探検達人への道

電車の中のおばさんの行動、スポーツドリンク、文庫版の背表紙、新聞の折り込み広告、女性の髪形、コミックスのヒーロー、などわれわれの日常には法則があふれている。その法則を発見し、説明し、意味を解釈し、応用する能力を開発することにより、人々の目は学問に対して開かれる。著者が三重大学の学生と五年間にわたって実践した法則探検の過程を、楽しい読み物として提示しながら、読者を文化・社会科学へ誘う一冊。

想(三)七

「……我々にとって良書とは、良く売れる本のことです……。」ある大手取次の書籍担当役員が、今年の出版五団体の新年会で述べた挨拶の一節である。

この挨拶を聞きながら、私の頭を過ぎったのが、昨年十月に亡くなった山本夏彦が書いていた文章のくだりである。

彼は、今の出版業界のことについて「一点で何千部何万部と出版し、然も数千点の書籍が毎月刊行される。書店の店頭はこれらの新刊書で溢れている。従って、新刊書が店頭に飾られる寿命も短くならざるを得ない。このような状態で、読者は自分の読みたい本に、あるいは古典となるような良書に出会えるのは容易でないだろう。」というような趣旨であった。

学術書、専門書の出版を標榜する日本学術出版部協会加盟出版部にとっても経営環境は益々厳しさを加えている。今こそ協会は、加盟出版部の利益を擁護し出版環境の改善のための施策を更に強力に推進することを求められていると想う。

加治紀男(流通経済大学出版会)

すべては、酒場から始まる

ある夕、昔の同僚と酒場で肩を並べていた。彼は、才能を持って余すかのように幾つかの出版社を渡り歩き、今はフリーの物書きだが、こうつぶやいた。

「物書き風情になって悟るところがあった。距離を置いてみて、つくづく編集者の重要性、エディタースhipの何たるかがわかってきた。とどのつまり、すぐれた編集者なしには、すぐれた書き手(創作家)は存在しないのさ」

上に修飾語のつかない只の編集者は、「何を今さら」と心中でうそぶいていたが、素直に肯う風で「お姐さん、お銚子もう一本」と声を上げ、鈍色の脳細胞で考えていた。——大学当局・データベイスを書き手に擬すれば、大学出版会(ユニヴァーシティプレス)というパートナーの役割も自ら鮮明に見えてくるはずだ。ところが、そこに想いをいたす日本の大

学人が何人いるだろうか——。

「さあ、こうしてはいられぬ。杯を捨てて街へ出よう。私は、ふたたび杯に手を伸ばしたのだった。

西協禮門(麗澤大学出版会)

環境の変化に思ふこと

世の中の活字離れ、電子メディアの隆盛化、書店の淘汰激化等々、出版業界を取り巻く事業環境が厳しさを増す中、どのような手立てを講じればよいか答えを出せず悩みもがく日々である。

このような状況の中でなすべきことは、教科書的には、変化をピンチでなくチャンスと捉え、読者・市場のトレンドを積極的に察知・分析し、適切かつ迅速な「対応」を取る……となろう。

しかし、如何に対応するかの前に、このような時にこそ創業の原点に立ち返ることが大切ではなかるうか。当出版部においては、読者・社会に何をもって貢献していくか、を明確に意識する必要があると思う。これは大学出版部という特性を踏まえた自らの存在意義を問い直すことに他ならない。それができれば「対応」は自ずと見えてくるはずである。

本来とうにやっつけて然るべきことであるが、日常業務への「対応」にかまけ、なおざりにしてきた宿題の重さに反省することしきりである。

萩原敏郎(産能大学出版部)

大阪大学出版会一〇年の航海

日本大学出版部協会設立四〇周年の今年、大阪大学出版会は一〇周年の節目を迎えている。その記念として、関西支部だよりとしていただいたこの紙面に、乗組員二人の小さな帆船OSUP(Osaka University Press)号の航海記録を残しておこうと思う。

OSUP号の船出は、大阪大学の教育研究活動にご支援いただいているアサヒビル株式会社からの寄附を基金としての、たいへん輝かしい希望に満ちたものだった。

日独両語・全三巻からなる大著『ウイグル文契約文書集成』を第一作に、学術書を中心とする地道な出版活動を行い、その中で大阪大学の源流である適塾・懐徳堂関連の概説書なども充実させ、時には「受賞」に祝杯をあげることもあった。

その一方で、学術出版であるがゆえの収支不均衡の波に、小船は揺れ続けてきた。

OSUP号最大の危機は、七年目も終わろうとする時に遭遇した大嵐だった。このままの収支だと近い将来燃料が尽きるのが目に見えていると、決算案をめぐり出版委員会が紛糾した。船は暗礁に乗り上げたかに見えた。

そんな折、OSUP号の命運を賭け、大阪大学創立七〇周年記念「大阪大学新世紀セミナー」全二刊の出版を引き受けた。このシリーズは、大阪大学における最先端の研究成果を一般の読者にもわかり易く発信しようという画期的な企画だった。九年目、OSUP号の甲板はセミナーのイメージカラー黄色一色に染まった。

この年、遅まきながらせめて京阪神の書店には、OSUPの本を並べてもらおうと、外部委託による販売促進活動を始めた。陸からの後方支援である。

翌年には、教育面でも貢献すべく、新しい教科書シリーズ「大阪大学新世紀レクチャー」を創刊。科研費図書も大幅に増えた。そして、一〇年目「既刊書も一〇〇冊を越え、各種支援を受けながらも、OSUP号はようやく安定した航海ができるようになった。

途中、キャプテンも乗組員も交替し、ふと心細くなる時もある。と思っていたら、AJUPに関西支部が発足した。船が時化に遭う日には、先輩方の胸を借りたい。

今、輝く海に頬を照らし、この帆船にもいつか高性能の動力機を装備して、大海をめざしたいと思う。

岩谷美也子（大阪大学出版会）

編集後記

ご存じの方も多いとは思いますが、二〇〇三年四月より協会の名称が「日本大学出版部協会」となった。殊更「日本」と付けたのは、国際交流を意識してのことのようだ。違和感を心配する意見もあったが、私などはすぐに慣れてしまった。

実は、名称変更が議論されはじめた頃、編集部会でも話題にしたことがある。

『「大学出版部日本協会」はどう?』

「どこかの支部みたいじゃない。」

「じゃあ、全日本にしたら?」

「きつと分裂して新日本が出来るよ。」

.....*

さて、『大学出版58号』をお届けします。本号では関西支部の近況を報告する「関西支部だより」のコーナーを新設しました。いままで、全国組織とはいえず京近隣の加盟出版部が活動の中心となりがちでしたが、関東地区以外の加盟出版部の活動にも目を瞠るものがあります。これからも日本大学出版部協会の活動にご理解をいただければ幸いです。

小野朋昭

（東海大学出版会・『大学出版』編集長）

関西支部だより

日本大学出版部協会加盟出版部一覽

- **北海道大学図書刊行会** 060-0809 札幌市北区北9条西8丁目 北海道大学構内
TEL 011-747-2308 FAX 011-736-8605
- **東北大学出版会** 980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1 東北大学構内
TEL 022-214-2777 FAX 022-214-2778
- **流通経済大学出版会** 301-8555 龍ヶ崎市平畑120
TEL 0297-64-0001 FAX 0297-64-0011
- **聖学院大学出版会** 362-8585 上尾市戸崎1-1
TEL 048-725-9801 FAX 048-725-0324
- **麗澤大学出版会** 277-8686 柏市光ヶ丘2-1-1
TEL 04-7173-3331 FAX 04-7173-3154
- **慶應義塾大学出版会** 108-8346 港区三田2-19-30
TEL 03-3451-6926 FAX 03-3454-7029
- **産能大学出版部** 158-0082 世田谷区等々力6-37-12
TEL 03-5760-7801 FAX 03-5760-7804
- **専修大学出版局** 101-0051 千代田区神田神保町3-8-3 専修大学4号館
TEL 03-3263-4230 FAX 03-3263-4288
- **大正大学出版会** 170-8470 豊島区西巢鴨3-20-1
TEL 03-5394-3026 FAX 03-5394-3038
- **玉川大学出版部** 194-8610 町田市玉川学園6-1-1
TEL 042-739-8935 FAX 042-739-8940
- **中央大学出版部** 192-0393 八王子市東中野742-1
TEL 0426-74-2351 FAX 0426-74-2354
- **東京大学出版会** 113-8654 文京区本郷7-3-1 東京大学構内
TEL 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958
- **東京電機大学出版局** 101-8457 千代田区神田錦町2-2
TEL 03-5280-3433 FAX 03-5280-3563
- **東京農業大学出版会** 156-8502 世田谷区桜丘1-1-1
TEL 03-5477-2562 FAX 03-5477-2643
- **法政大学出版局** 102-0073 千代田区九段北3-2-7
TEL 03-5214-5540 FAX 03-5214-5542
- **放送大学教育振興会** 105-0001 港区虎ノ門1-14-1 郵政互助会琴平ビル3F
TEL 03-3502-2750 FAX 03-3592-2482
- **明星大学出版部** 191-8506 日野市程久保2-1-1
TEL 042-591-9979 FAX 042-593-0192
- **早稲田大学出版部** 169-0071 新宿区戸塚町1-104-25
TEL 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406
- **東海大学出版会** 257-0003 秦野市南矢名3-10-35 東海大学同窓会館内
TEL 0463-79-3921 FAX 0463-69-5087
- **名古屋大学出版会** 464-0814 名古屋市千種区不老町1 名古屋大学構内
TEL 052-781-5027 FAX 052-781-0697
- **三重大学出版会** 514-8507 津市上浜町1515 三重大学出版ホール内
TEL 059-232-1356 FAX 059-232-1356
- **京都大学学術出版会** 606-8305 京都市左京区吉田河原町15-9 京大会館内
TEL 075-761-6182 FAX 075-761-6190
- **大阪経済法科大学出版部** 581-8511 八尾市楽音寺6-10
TEL 0729-41-8211 FAX 0729-41-9979
- **大阪大学出版会** 565-0871 吹田市山田丘1-1 大阪大学事務局内
TEL 06-6877-1614 FAX 06-6877-1614
- **関西大学出版部** 564-8680 吹田市山手町3-3-35
TEL 06-6368-1121 FAX 06-6389-5162
- **関西学院大学出版会** 662-0891 西宮市上ヶ原一番町1-155
TEL 0798-53-5233 (内線3475) FAX 0798-53-9592
- **九州大学出版会** 812-0053 福岡市東区箱崎7-1-146 九州大学構内
TEL 092-641-0515 FAX 092-641-0172